# 壊れた籠

紅月　時夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壊れた籠

【Ｎコード】
Ｎ２５０９Ｏ

【作者名】
紅月　時夢

【あらすじ】
ずっと迷っていた。
あっという間に過ぎ去ったこの四年間。あいつらが動きだしたっていうなら……俺はもう、迷わない。
何をしてでも護りたいヤツがいるから、彼は動きだす。

この４年間、俺は知っていながら何も出来なかった。
自分は神羅の人間だから、タークスだから。自分自身に言い訳をし続けて、行動しなかった。だけど、捕まってたあいつらが行動したんだ。だったら、あいつらよりも多少の自由を持ってる俺が、行動しないわけにはいかない。

「もう言い訳も、逃げることも、しないぞ、と」

本当に守りたいものを守れない奴になんか、なりたくない。何より、守ると約束した。何があっても守ると約束した。

その約束を違えたくない。

「今頃、タークスはどうなってるだろうな…」

何も言わずに飛び出してきた。。ツォンさんの机の上に辞表を置いて、誰とも顔を合わせることなく飛び出してきた。
きっと、俺の行方も探してるだろう。

迷惑をかけるとわかっている。けど、仕事よりも大切な者ができた。タークスであることの誇りを捨ててもいいと思える程、守りたい大切な奴ができた。

「どこにいる…！！」

ミッドガルへ向かって二人が進んでいることはわかっている。だから、絶対にこの森のどこかにいるはずだ。腐ってもザックスはソルジャー。少なくとも、道を間違うようなことはないはず。
必ず、近くにいるはずなんだ。

……会いたい。

姿を見たい。

顔を見て、名前を呼びたい。

がむしゃらに走り続けて、俺の体力は削られていく。木の根が土から顔を出している道無き道。決して好条件とは言えない森の中。こんなところで走り続けてたら、そりゃあ体力もすぐに削られるよな。けど、今逃げている二人の方がもっとキツいんだ。体力なんて、きっと無いに等しいはずんだ。早く見つけださなければならない。

「…っ！今、銃声が」

微かに聞こえてきた何発もの発砲音。あれは、軍が使っている銃のものだ。
ってことは…！

「間違いない……いる！」

音が響いてきた方向へと、俺は向きを変更する。
ずっと使ってきた愛用のロッドを手にして、再び決意を固めた。

５分くらい走った頃、ようやくその場に辿り着いた。
３０人くらいの一般兵の奥に、ザックスが剣を構えて立っているのが見える。かなり肩で息してやがるな。相当疲労が溜まってる。
だいたい、１０人ってとこか。

木の影で静かに、電磁ロッドのスイッチを入れた。

「ぐぁ！」
「あ〝ぁ〝！」
「何だ！どうした？！」

ドサドサと兵士が倒れていく音と、生じた悲鳴。それらに一般兵、ザックスの注意が俺に向く。そんな中、敢えてゆっくり、一般兵のど真ん中を歩いた。

「タークス？！何の真似だ！」
「いやぁ、俺を何と勘違いしてくれたのか。こっち向くなり襲い掛かってきやがったから１０人くらいのしといだぞ、と」

怒鳴ってきたのは、この部隊のリーダーだな。俺の言葉に簡単に騙されたところを見ると、手柄をタークスに奪われないために何か言ったに違いない。

まぁ、よくあることだ。軍はソルジャーとも、タークスとも仲はあまり良くない。全員が全員じゃなくとも、手柄を取る俺たちを恨めしく思ってる。そんなこと思う暇があるなら、モンスターの一匹でも倒した方が名も上がるだろうに。

「レノ…」

「よぉ、ザックス。４年振り…だな、と」

ザックスを真正面から見返す。あいつも、同じように見返してくる。あぁ、情けない。上手く作り笑いすら出来やしねぇ。

そんな俺を見てなのかはわからないが、ザックスの表情が歪んだ。

「お前、軍と手を組んでたのか？」

「まさか。偶然だぞ、と。銃声が聞こえてきて、来てみたらお前がいた」

嘘じゃ、ない。

確信はあったけども。

「捕まえにに来たのか」

「愚問だな。タークスに下された任務は、ターゲットを生きたまま捕獲すること。必ず、生きて捕まえること。それを覆すことは、タークスには出来ないぞ、と」

そう伝えれば、またザックスの表情が歪む。

なんだよ。これぐらい知ってるだろ？シスネの奴と会ったはずなん

だから。

「だからタークスは手緩い。我ら軍に任せておけば、命令通り殺して終わりにするものを」

隊のリーダー……いや、軍はあくまでもあいつを殺したいらしい。そりゃそうだ。逃げ出したサンプルであるザックスはソルジャークラス１ｓｔ。殺せば、軍の名は飛躍する。

だが…

「黙れ」

許さない。

「だから、軍なんかに任せるわけにはいかないんだぞ、と！」

振り向きざま、俺はリーダーの男の側頭部をロッドで殴り飛ばした。

「レノ？！」

ザックスの驚愕の声と、一般兵のざわめきが耳に届く中、俺は不適に微笑んだ。

あぁ、これで俺は立派な

「かかってこいよ。レノ様が相手してやるぞ、と」

神羅の裏切り者だ。

「レノ、お前神羅を裏切るつもりか？」

全員を片付けた時、ザックスの声が飛んできた。だから、俺は振り向きざまに答えた。

「言っただろ？任務を覆すことはタークスには出来ない。…タークスには、な」

明確な答えを。

「クラウドに、合わせてくれよ、と」

アホ面をかましているザックスに、俺はそう投げ掛けた。

森の奥にある洞穴。
今ザックスはそこを中心に動いてたとこだったらしい。洞穴に着くまでの間、ザックスが何を求めているのか。どうやってあの地下室から逃げ出したのか。色んなことを聞いた。
話をしてたら辿り着くのはあっという間で、洞穴に到着する。

その中に、クラウドはいた。

「クラウド…」

虚ろな瞳。弛緩した体。反応の無い表情。その様が物語っていた。。
シスネから聞いて、覚悟、してたんだけどな…。

「魔晄中毒、なんだよな」
「あぁ。しかも」
「重度の、だろ？」
「……あぁ」

クラウドの隣に膝を着き、昔より色の薄い頬に触れた。温かい体温は、彼が生きていることを教えてくれる。

「っ…！！」

夢中でクラウドを抱き締めた。反応なんかなくたっていい。ただ生きて、ここに存在してくれるだけで、途方もない喜びを感じることが出来る。

「生きててくれて、良かったぞ、と」

脈打つ鼓動が伝わってくる。一打ち一打ちに、生命の力強さってヤツが感じられる。

「ありがとな、ザックス。クラウドを守ってくれて」

「当ったり前だろ？クラウドは俺の大事なの親友だぜ。見捨てるわけないさ」

「そうだな、と」

そう、ザックスはこういう男だ。

だから、信じることが出来る。

「レノ、そろそろお前の方も教えてくれてもいいだろ。どうして一人で来たんだ。いや、この際一人なんてことはどうでもいい。なんで神羅を…」

「大切なもの一つ、守れない奴になりたくなかったからだぞ、と」

この思いはずっと胸にあった。それを、俺はやっと実行出来たに過ぎない。

「俺がタークスでいることで一番大切なものを守れなくなる。それどころか傷つけるだけなら、俺はタークスを辞めてやるさ」

「お前、まさか…」

「くくっ、ツォンさんの机の上に辞表を置いてきたぞ、と」

ザックスの表情がマジで情けないくらいの間抜け面。これは笑わずにはいられない。

クラウドを腕に抱いたまま腰を地面に落ち着けると、ザックスが隣にきた。降ってきたって表現が似合うくらい、素早く。

「お前、それがどういう意味かわかってんのか?!」

「わかってる。当たり前だぞ、と。俺にも追っ手がかかるだろうが……別にいいさ。覚悟して来たんだ」

タークスは神羅の機密事項を扱う課だ。だから、タークスは永久就職みたいなもの。

「タークスを辞める。すなわちそれは、俺の死を示すってな」

それでも、いいと思った。

「レノ……お前死ぬつもりなのか」

「まさか。俺の願いもお前と同じ、自由に生きることだ。まぁ、クラウドとって付くけどな」

お前はおまけで一緒にしといてやるよ。

「おまけって、俺の扱いひどっ!」

よよよ…って泣くフリをするザックスがおかしくて笑う。ザックスも笑った。大切なものが腕の中にあるからだろうか。久し振りに思い切り笑える。けど…まだ心からは、無理だな。クラウドのことを思うと。

「久し振りだな、こんなに笑ったの」
「俺もだぞ、と」
仕方ないさ。ずっと逃げてたんだ。気が休まることなんて無かったんだろ？
「な、クラウド、お前もレノといられて嬉しいよな？」
クラウドの頭をわしわしと撫でるザックスの表情はどこか暗い。クラウドの頭は力無く左右に揺れるだけ。
意識があるのか無いのかさえわからない。暗いなるのも仕方ないよな。
ザックスが手をどけると、強く、しっかりとクラウドを抱き締めた。柔らかな金髪に顔をうずめたら、懐かしい香りが鼻腔をくすぐる。
「……い」
何だ？
「ザックス、何か言ったか？」
「いや、何も？」
ザックスを見れば、不思議な顔でキョロキョロと辺りを見回している。こいつにも聞こえたみたいだな。でも、じゃあ誰だ？ここにいるのは俺とザックスと……！！
まさ、か…。

「レ、ノ……くるし」

心臓が、止まるかと思った。
腕を緩めて見下ろせば、光の宿った、昔とは違う青い瞳があった。

「あんた、なんて顔してんだよ」

手が伸びてきて、俺の頬に触れる。

「泣くとこなんて、初めて見た」
「…誰のせいだと、思ってんだよ、と」

クラウドが、いた。

「ん……ごめん」

枯れたと思ってた涙。無いと思ってた涙。
けれどまだ、俺の中に残っていた涙。

「クラウド…！」

胸に溢れる思いは言葉で言い表わすことが出来なくて、言葉が詰まる。ただただ嬉しくて、その体を抱き締めた。

「クラウド、よかった。よかったぜ！」
「ザックス」

ザックスの目にも、微かに涙が見えた。乱暴な仕草で拭っているが、どうやら止まらないようでずっと目元を拭っている。

「心配かけさせやがって」

それでも浮かんだ笑顔は、４年前にはいつも見ることが出来ていた太陽みたいな笑顔。そこに先ほどまでの暗さは無く、本当に太陽みたいだ。

「ごめん…。ずっと守ってくれて、ありがとう」

伸ばされた手を、ザックスはしっかりと掴む。まだ力の入らないクラウドも、弱々しくながら掴み返しているのが見てとれる。

「当たり前だ。お前を放り出しないよ、トモダチ…だろ？」

その言葉に、クラウドは嬉しそうに頷いた。

前にザックスが『お前ら2人の間には入れない』とか言ってたが、俺だってそうだ。兄弟のようなこの2人の間には入れない。悔しいし、妬くけどな。

「にしても、流石レノとクラウドだ」

「？」

ザックスの言葉の意味がわからなくて、俺とクラウドは顔を見合わせた。

「ザックス、何が言いたいんだ、と」

「んー？わかんねぇ？」

ニヤニヤ笑うザックスに何か得体の知れないものを感じてると、クラウドが俺にしがみついてきた。こいつも何か感じてるらしい。

「クラウドが元に戻ったのはアレだろ？」

何か、すげぇこと言われそうな気がする。凄い、こっぱずかしいことを。

「お前らの“愛の力”ってヤツだ！」

おいおい。

「ザックス！」

「クラウド、顔真っ赤だぜ？」

「う、うるさい！」

ザックスの言葉に腕の中を見れば、耳まで真っ赤になったクラウドがいた。

あーあ、不可抗力だぞ、と。

「ったく、可愛い反応してくれるな、と」

呟いた言葉はザックスには勿論、クラウドにも届かなかったらしく、言い争いを続けている。

「な、クラウド」

「？」

名前を呼べば、俺を見てくれる。その瞳に俺が映っていることが嬉しくて、笑うことを止められない。

「ザックスに“愛の力”見せてやるか？」

「は？え…ちょ、レノ！！」

俺を見上げたままのクラウドの頭を固定して、そのまま触れるだけの口付けを落とした。

「なっなっ……何して！」

「ん？そりゃあキ」

「わー！わー！言わなくていい！」

一瞬のキスにも慌てるクラウドが愛しい。さっきよりもその顔は真っ赤。いや、ホントかわいすぎる。

「見せ付けてくれるな～」

またニヤニヤ笑うザックスにうるさいと叫び、クラウドは俺の服に顔を埋めた。

「ザックス、あんまりいじめてくれるなよ、と」

「わかってるって」

クラウドの柔らかな金糸を手ですいてやれば、固く握られていた手がほぐれていく。

放したくない。

離れたくない。

腕の中の愛しい存在は、いつの間にか俺の中の大部分を占めていた。

「さて、今日はこのままここで休もう。せっかくクラウドも目が覚めたことだし、ゆっくりしようぜ」

笑うザックスは突如、剣を持って立ち上がると、外へ向いた。

「ちょっと外見てくる。そうだな……30分くらいしたら戻ってくるな」

歩きだしたと思ったら、小走りに戻ってきて俺の耳元で囁いた。

「説明…ちゃんとしとけよ」

何のかなんて必要ない。

「わかってるぞ、と」

ザックスに笑い返すと、今度こそ外へ出ていった。

気を使わせたんだと、今更ながらに気付く。

説明な…確かにちゃんとしとかないとな。でも、その前に。

「クラウド」

「？」

４年振りの２人きりも時間。少しだけ堪能させて欲しい。

「名前、呼んでくれないか？」

ハッと目を見開いたと思った直後には、もうクラウドの瞳は潤んでいた。

「…レノ」

久し振りにじっくりと聞く、クラウドが俺を呼ぶ声。

「レノ…あんたも、呼んで？」

それを聞いて、クラウドも同じ気持ちなんだと思うと嬉しかった。だから、ありったけの想いを込めて声に乗せる。

「クラウド」

「レノ」

「クラウド」

「レノ…っ」

くしゃっと歪む表情に、いとおしさが込み上げてくる。

「レノ…会いたかった」

「俺もだぞ、と。ずっと会いたかった」

そっと頬に触れれば、クラウドの手が上に重ねられた。

「愛してるぞ、と。生きててくれて、ありがとな」

そして俺は、さっきとは違う、深くて長いキスをした。

end

**（後書き）**

シリアス甘なるものに挑戦してみました。
一応甘くはなったと思います。

レノがクラウドを追って神羅を抜けたら…！

という私の妄想２００％で出来ております（笑）

ザッ君、生きていればいいじゃない。

レノとクラ、幸せになればいいじゃない。

ザッ君はエアリスと幸せになればいいじゃない。

とか色々思いながら…（笑）

作りながら終始ニヨニヨ（（危
楽しかったです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2509o/

壊れた籠

2010年10月11日13時17分発行